P-6-6
看護学生の「赤十字の一員として」意識向上を目指した協同学習の効果

姫路赤十字看護専門学校[1)]、姫路赤十字病院　看護部[2)]

○小野（おの）　真弓（まゆみ）[1)]、石谷　尚美[1)]、八幡　宏美[1)]、藤田美佐子[1)]、
神戸真由美[1)]、藤元由起子[1)]、中林　朝香[1)]、菊本　牧子[1)]、
齊藤　千晶[1)]、石原知代子[1)]、山田　道代[1)]、坂本佳代子[1)]、
松井　里美[2)]

本研究の目的は、コロナ禍で学ぶ赤十字看護学生が、「赤十字の一員として」意識していることを明らかにし、さらに、他校赤十字看護学生とのオンライン交流会（以下オンライン交流会）による協同学習の効果を明らかにすることである。
A校2年生に対し、「赤十字の一員として」意識向上を目指した協同学習を実施した。事前に課題を明示し、「赤十字の一員として大切にしたいこと今自分にできること」について、自己の考えをレポートにまとめた。その後、クラスでグループワークに取り組み、オンライン交流会に臨んだ。オンライン交流会後、クラスで学びの発表会を行い、課題への取り組みから得られた学びについてアンケート調査を実施した。課題レポートとアンケート調査の記述内容は質的帰納的に分析した。結果、看護学生が考える「赤十字の一員として大切にしたいこと、今自分にできること」として【相手に対する姿勢】【自己の課題】【患者に対する姿勢】【感染対策】【ボランティア・救助活動】【学校・クラスでの取り組み】【感謝の気持ち】の7カテゴリが抽出された。赤十字看護学生同士の交流を通して学んだこととして【同じ志の仲間の存在】【思いの共有】【自校・他校の魅力の発見】の3カテゴリが抽出された。
同じ志をもつ仲間とつながり、グループワークや交流会を通して、ともに学ぶ協同学習は、「多様な考えに触れ、視野を広げる」「仲間と切磋琢磨しながらやり遂げ達成感を得る」「自校・他校の魅力を発見し、モチベーションを高める」機会となり、個人はもちろんのこと、クラス全体の意識を向上させる効果が明らかになった。

P-6-7
取り下げ

P-7-1
高齢患者に実施した救急病棟デイケアの評価

旭川赤十字病院　看護部　HCU・救急外来

○吹田（ふきた）　千明（ちあき）、菅原　麻央、水上　友紀、太田　文子、大塚　操

【背景】A病院の救急病棟（以下、HCU）に入院となる患者の約7割が65歳以上の高齢者である。急性疾患の治療では、疼痛、薬剤、拘束、安静などADL低下につながる危険因子が多く存在する。そのため、生活の質の維持に向けたケアが重要と考え、2020年にHCUデイケアチームを立ち上げた。看護師は離床に積極的になり、デイケア中の患者の表情が良いという結果を得た。そこで今回、HCUデイケアに参加した高齢患者がどのように感じているのかを明らかにしたいと考えた。
【研究目的】HCUで実施しているデイケアに対し、高齢患者の気持ちの変化を調査し評価する。
【研究方法】1．研究デザイン　量的記述的統計研究
2．対象　2022年3～5月にHCUに入院した高齢患者
3．調査内容　1）患者属性　2）デイケア実施時間・内容　3）デイケア前後のフェイススケール（FRS: Wong-Baker faces pain rating scale）
4．データの分析方法
患者属性は記述統計を行い、デイケア前後のフェイススケールはWilcoxonの符号付順位検定を用いた。統計解析には統計ソフトSPSS（ver.28）を使用し、有意水準は5%とした。
5．倫理的配慮　A病院の倫理審議会の承諾を得て実施した。
【結果】HCUデイケアは高齢患者14名を対象に実施した。年齢（平均値±標準偏差）82.57±7.85歳、男性10名（71.4%）であった。デイケア実施時間（平均値±標準偏差）は44.78±28.30分で、デイケア実施前後のフェイススケールによる気持ちの変化は、実施前「1～5」から実施後「0～2」を示し、実施前後のデータ間に統計学的な有意差が認められた（$p<0.001$）。
【考察】HCUデイケアは高齢患者の気持ちの変化に有効と考えられるため、今後も積極的な介入を考慮する必要がある。

P-7-2
コロナ過で意欲低下のある患者に対する病棟内デイケアの効果

静岡赤十字病院　看護部

○森藤（もりとう）あゆみ

【目的】コロナ過の入院で家族らとのつながりが減り意欲低下が見られた脳神経内科入院患者3名に対し、A病院202X年より開始された病棟内デイケア（以下デイケア）を実施し、意欲への影響を明らかにする。【方法】研究期間202X年Y月～Y+3月。SOAP記録とデイケア参加時の意欲の変化を観察する目的に意欲指標のうち意思疎通とリハビリの2項目を評価した。A病院倫理委員会で承認を得た。【成績】B氏80代女性。パーキンソン病（以下PD）。入院期間38日。入院23日目介入。参加回数3回。2回目の参加時には担当者の顔を覚え、自らデイケアに行く支度ができた。初回は車いすで参加していたが2回目以降は歩いて参加できた。2回目以降の意思疎通・リハビリはともに1点上昇した。C氏80代男性。PD。入院期間44日。入院5日目介入。参加回数8回。3回目には担当者やD氏と顔なじみの関係になった。3回目以降の意思疎通・リハビリはともに1点上昇したが、7回目はPD治療薬が増え意思疎通は1点減点した。薬剤調整され点数は戻った。D氏80代男性。PD。入院期間55日。入院23日目介入。参加回数9回。発語は少なかったがC氏の塗り絵を見て褒める事があった。C氏のリハビリを見てD氏も一緒にリハビリに取り組む姿があった。意思疎通は8回目以降1点上昇、リハビリは5回目以降に1点上昇した。【結論】意思疎通とリハビリの意欲が向上した要因は2つ考えられる。1つ目は、病状回復期にデイケアに参加できた事である。2つ目は、他者と関わる機会が持てた事である。コロナ過で家族面会もほとんどなく、他者とのつながりも簡単には取れない入院環境下において、病状が落ち着いてきた時期に同じ目的・同じ時間をともに過ごす仲間がいたデイケアでの活動は、顔なじみの関係構築を促進し、意欲向上に影響した可能性がある。デイケアへの参加は意欲に影響することが明らかになった。

P-7-3
急性期病院でのデイリハビリテーションの取り組み

松江赤十字病院　脳神経センター

○梶野（かじの）　好美（よしみ）、宇山　真弓

【はじめに】　島根県の高齢化率は33.9%で当院の60歳以上の入院患者は70％である。脳神経センターは、高齢者に加え脳血管疾患によりせん妄ハイリスク患者が多く、神経脱落症状を有するため患者の安全を守るための身体拘束の実施も少なくない。そこで、高齢患者と脳血管疾患のある患者へのせん妄予防と離床・患者の楽しみにつながることを目的に、病棟デイリハビリテーション（以下デイリハ）を実施したので報告する。【期間】2021年7月～2022年3月 【対象】安静度が車椅子座位の許可以上の指示かつ座位が保持できる患者で、参加意思確認ができ、感染防止対策に協力ができる患者3～4名とした。【方法】病棟内の高齢者勉強会に参加した病棟看護師1名と作業療法士1名（可能な時のみ）が、14時～15時30分に詰所内のカンファレンスルームで、リアリティオリエンテーションや風船バレー、カレンダー作りなどレクレーションを実施した。【結果】対象者は48名で、男性10名、女性38名で、年齢は50代1名、60代5名、70代11名、80代18名、90代11名であり、認知症を有する患者は20名であった。　患者は離床時間が増え、身体拘束解除の時間が増加し、生活リズムがつくことで90%が夜間睡眠できた。また、参加した患者は、「楽しかった」との感想だった。【考察】病棟で日々関わっている看護師がデイリハを行う事は、患者の安心感につながり楽しさを感じられたと考える。デイリハでの活動や他者と関わる刺激により夜間の睡眠につながった。また、デイリハを経験した看護師のアンケートより、「デイリハを通し患者の持てる力に気づいた」「患者の人生史を聴くことでその人らしさに触れ、高齢者看護の面白みを知った」などあった。またデイリハで得た情報を日々の看護に生かすなど、看護師の教育にもつながったと考える。

P-7-4
COVID-19 妊産褥婦および関わるスタッフの安心・安全のための取り組み―第２報―

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院　看護部

○藤井奈津子（ふじいなつこ）、神戸ふく実

【目的】隔離管理中のCOVID-19陽性者・濃厚接触者の母子に対し、オンライン会議システム（以下Zoomとする）を用いた面会を実施し、母子分離中の愛着形成を支援する。隔離管理中の母に対し、統一した保健指導や退院支援が行えるようにする。【実践内容】1）隔離管理中の母子に対し、病棟のタブレットを活用してZoomを用いた面会を実施した。2）COVID-19関連患者の帝王切開パスを新規に作成した。3）隔離期間中は直接授乳ができないため、保健指導用紙を作成して乳房管理の方向性を周知し、統一した指導を行うようにした。【結果】第6波は転院が早く実施例が少なかったが、第5波を中心に8-9組の母子にZoom面会を実施した。ほとんどの母から「画面越しであっても実際の顔や姿が見られて嬉しい。」との声が上がった。スタッフの意識調査では「母の心からの笑顔が見られて嬉しかった。」「動いている様子や泣き声を実際に映像や音声で見られることに意義がある。写真ではわからないことが伝わる。」「母自身が安心することで回復につながる。」との回答が得られた。帝王切開パスや保健指導用紙を活用することで、退院までの流れや乳房管理について統一した指導が行われ、スタッフから「作成前は介入が消極的になりがちだったが、指導用紙ができてから全ての対象褥婦さんに同じように関われるようになった。」との声が多数出た。【考察】COVID-19陽性患者・濃厚接触者は専用病棟・専用病床に入院しており、新生児との分離を余儀なくされる。産科病棟と異なり、助産師の介入も限られる。Zoom面会により母子分離中の愛着形成の一助となり、患者満足や心からの笑顔につながった。患者満足により、スタッフ達も看護者としての介入を肯定し、やりがいや充足感につなげることができた。